

大岡 信 著

詩 へ の 架 橋



岩 波 新 書

大岡 信著

詩への架橋

岩波新書

12

大岡 信

1931年静岡県三島市に生まれる

1953年東京大学文学部卒業

詩人，明治大学教授

詩集—「記憶と現在」

「わが詩と真実」

「遊星の寝返りの下で」

「悲歌と祝禱」

「大岡信総合詩集」など

著書—「現代詩試論」「超現実と抒情」

「紀貫之」「彩耳記」

「岡倉天心」など

詩への架橋

岩波新書(黄版) 12

1977年6月10日 第1刷発行 ©

¥ 280

著 者 おお大 おか岡 まこと信

発行者 岩波雄二郎

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発行所 株式会社 岩波書店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・三陽社 製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目

次

1	プロローグ・・・・・・・・・・・・・・・・・・	一
---	-------------------------	---

シュメールの諺から茂吉の恋歌まで

2	敗戦と読書・・・・・・・・・・・・・・・・・・	二三
---	-------------------------	----

「鬼の詞」の仲間たち

3	「愛」と「旅」と「死」の歌・・・・・・・・	五
---	-----------------------	---

若山牧水、釈迢空、窪田空穂

4	詩を書きはじめたころ・・・・・・・・・・	七五
---	----------------------	----

『春夫詩鈔』、『月に吠える』、ボードレール

5	ある選詩集のこと・・・・・・・・・・・・・・・・	九五
---	--------------------------	----

中原中也、立原道造、十四行詩という詩形

6	西欧詩入門・・・・・・・・・・・・・・・・・・	一二九
---	-------------------------	-----

『ドイツ詩集』、『英国の文学』、ラフォルグ、リルケ

7	愛誦した詩……………	一四二
	萩原朔太郎、室生犀星、三好達治、「向陵時報」、中野重治	
8	フランスの詩とフランス語……………	一七七
	『月下の一群』のグルモンからブルトン、エリユールまで	
9	寄宿寮と教室の間で……………	一九九
	エリオット、万葉集、新古今集、そしてランボー	
10	エピローグ……………	二二二
	菱山修三、そして私自身	
	引用詩書目一覧……………	二三五

1 プロローグ

1 プロローグ シュメールの諺から茂吉の恋歌まで

むかし、こういう諺をもっている人々がいた。

銀をたくさん持っている者は仕合わせだろう。

麦をたくさん持っている者は嬉しいだろう。

だが、何も持っていない者は眠れるだろう。

ものぐさ太郎の哲学の気味もある。しかし、この諺をよんで思わず吹き出し、ついで小気味いい文句じゃないか、と共鳴する人も少なくないだろう。諺というが、諷刺のきいた短詩といってもさしつかえない。ところでこれはいつごろできた諺なのか。かなり古い。かなりというよりも、非常に古い。こういう諺を口にしていたのは、じつは今から五千年もむかしの人々である。

メソポタミアといえはいうまでもなく人類最古の文明のひとつが誕生した土地である。その

南部地域がシュメール。そこに、紀元前三千年のころ都市国家がさかえ、文明が発達した。シュメール文化とよばれているものがそれである。シュメール人は例の楔形文字くさびがたもじを完成した人々である。粘土の豊かなこの地域で、人々は粘土をたたいて固い板にし、そこに尖った硬い筆で楔形文字を彫りこんで、文章や詩を書いた。それらのふしぎな文字板が大規模に発掘され、しだいに解読されはじめてから、まだ一世紀とはたっていない。シュメール文化が紀元前二千年ごろに滅びたのち、メソポタミアにさかえたのはバビロニア文化とアッシリア文化である。それらはいずれも千五百年前後つづいている。それからまた数百年がたつて、ようやくキリスト紀元が始まるというわけだから、ともかく古いむかしのことである。

このシュメールやバビロニアの人々が口にしていた諺のひとつが、つまり今あげたものだったというのである。

別の諺に、こういうのもあった。

人の楽しみに結婚がある。

考えてごらん、離婚もある。

また別の諺には、

腹がふくれるのは楽しいが
腹がふくらむのは面倒だ。

うまいことを言うものである。こういう人間生活の一面に関しては、人類は五千年のむかしも今もまるで変わっていないらしい。今引いた諺はサミュエル・クレイマーというメソポタミア文化や楔形文字研究の大家として知られるアメリカの学者の著書『メソポタミア（ライフ人間世界史¹³）の中に引用されているものだが、こういうものを読むと、人類の科学技術や文明生活の便宜がいかに驚異的な進歩をとげたところで、人間自身はむかしから今にいたるまでえんえんと続く《人間喜劇》の幕間狂言を、楽しげに、あるいは哀れに、演じつつけている点で変らないのではないか、という思いに襲われる。

文明の曙といわれるメソポタミアの時代からすればいぶん後の時代、けれども私たちから見れば相変わらずおそろしく古い時代に、ローマ帝国があった。そのローマ時代にも、人々は歌をうたい、劇に熱狂し、詩に興じた。

マールティアーリスという詩人がいた。イエス・キリストが十字架についた時から十数年後に生れ、ローマで異色の短詩形詩人として知られた。エピグラム、つまり諷刺、毒舌、駄洒落、

軽口など、寸鉄人を刺す短詩の名人で、その種の作品をたくさん残した。この詩人の詩集『エピグラム集』から、いくつか引いてみる。

マールティアーリス
樋口 勝彦 訳

医 師

ディアウルスは、以前医者であった。が今では葬儀屋だ。

葬儀屋として彼がしている仕事は、医者の中にしていた事と同じだ。

哲 学 者

神々は存在しない。天は空虚なものだ、とセギウスは主張する。

彼はこれを実証している。というわけは

この否定説を述べているうちに、彼は金持ちになってしまったから。

金持ち

カンディドウスよ、君はひとり土地を持ち、君ひとりが金を持ち、君ひとりが黄金^{こがね}作りの食器を持ち、君ひとりが螢石^{けい}の酒杯を持ち、君ひとりがマツスイクム酒を持ち、君ひとりがオピーミウス執政官の年のカエクブム酒を持ち、

君ひとりが英知を持ち、君ひとりが才能を持っている。

何でも君はひとりで持っている。だが——まさか、そんなことはあるまいと思いたい——

カンディドウスよ、君は細君を人と共有している。

女に

ガルラは僕に気があって、許す気がない。彼女は気があって気がないのだから、彼女はこういう気なのかわからない。

同じく

クロエーよ、お前の顔がなくても僕はかまわない。

首がなくても、手がなくても、足がなくても、

乳房がなくても、腰がなくても、尻がなくても、

——一々数えあげる煩はんをさければ、

お前全体がなくても、僕はかまわない。

同じく

ポルラよ、お前は腹のしわを、豆粉をぬって、かくそうとするが、

お前がぬりかくそうとするのは腹の方で、僕のこの口ではない。

多分小さいかも知れない欠点は、すなおに見せておけ。

かくすと、欠点は実際より大きく思われるものだ。

挨拶

ナエオルスよ、君が心静かな時には、君ほどこいやなやつはない。
ナエオルスよ、その同じ君が、心配事のある時は、君ほどこいい人もない。
心静かな時には、君は誰にも挨拶を返さない。誰でも見くだす。
君の目には誰も自由市民には映^{うつ}らないし、生まれた人間にさえ思われぬ。
心配事のある時は、人に贈り物をする。主よ、とか、保護者よ、と言って
挨拶する。宴にも招く。ナエオルスよ、君に心配事があってくれ。

酒

君は夜を徹して飲む時には、どんな約束でもする。朝になると、
なんにも実行してくれない。ポルリオーよ、君朝飲んでくれ。

二千年もむかしの詩だが、うたわれていることのひとつひとつが、そのまま私たちを笑わせ、

思わず膝をたたきたくなるような面白さを感じさせる。ひどく遠い過去のまた過去に、茫として霞んでいるように思われるローマ帝国だが、そこで生きていた人々の日常生活、人間関係は、こういう諷刺詩の中で、つい昨日の出来事のように保たれ、いつでも息を吹きかえす準備をして、本の中に眠っている。

同じローマ帝国にカトウルスという詩人がいた。紀元前八七年前後に生れて前五四年ごろに死んだらしい。つまりマールティアリスよりも一世紀ほど前の詩人である。三十代のはじめに世を去ったこの詩人は、ウェーローナの名家に生れ、ローマに出て勉強し、社交界で華やかに浮かれた日々を送っていたが、レスビアと彼が名づけたある年上の人妻に恋をしてさんざん苦しんだことから、たくさんすぐれた恋の詩を残すことになった。彼の恋愛詩のあるものは優しく、あるものは皮肉や怨みでにがしく、有頂天の歓びから疑惑、憎しみ、絶望にいたるまで、恋の幸福と不幸をうたって心をうつものが多い。サッポーをはじめとするギリシア抒情詩の伝統をラテン詩の中に受けつぎ、ローマ時代の恋愛詩とりわけ祝婚歌の先駆者となったといわれている。このカトウルスが恋をした相手はローマのさる権門の妻クローディアだとされている。この女性は美貌と機知とぜいたく好きと、そして身持ちの悪さで有名だった。そういう女に夢中になった男が、もし才能あるうたびとであれば、詩の琴がじつにさまざまな音色で鳴りだすのは当然といっている。

1 プロローグ

日は沈んでも

呉カ
ト
茂ウ
ール
訳ス

生きようよ、私のレスビア、そいで

愛しあはうよ、

気むづかしやな年寄りどもの

かげ口なんどは

そつくりで びた一文に

値ぶみしとかう。

太陽は、日々沈んでもまた

昇りもえよう

が、私たちの短い光のひとつたび

沈めば、

いつまでも明けぬ 一夜を

眠るほかないのだ。

さあ接吻くちづけを千たびもおくれ、

それから百も、

そいからもう千度、つづいて

また百度、

それからもう千度まで、

それから百たび、

そいで何千たびも やりすましてから、

そいつを

みんなまぜつ返しちまはうね、

わからないやう、

それにまた誰か 意地悪いやつが

やつかみもできないやう、

そんなにまで接吻くちづけが たんとあるつて

わかつた時にも。

この有頂天にのぼせあがった恋人は、故郷の人々がある女性の美しさをレスビアと並べて語るのを聞いて、憤慨してこんな詩をつくる。

いやあ、これはこれは

呉カ
ト
茂ウ
ール
訳ス

いやあ、これはこれは、
些いささか小さ過ぎないお鼻を

お持ちの御女中、お足も綺麗、お瞳めも黒い、

お指もすんなり、口許も小ざつぱり――

とはみな行きかねる。

まつたく、お上品すぎるとは申せない

物言ひぶりだね、

フォルミアエの身代限りをした男と

仲好しの御婦人さま。

あんたですかえ、地方でもつて

美人の噂が高いつてえのは。

あんたと私どものレスビアさんが

較べものになつてゐるんだつて？